

自然の施設への配慮



高 橋 系 吾

「動物を可愛がる人は愛情の深い人で友達に親切な人であります。何時の日か幼稚園に空飛ぶ小鳥が集り野鳥の巣ができ、動物達の楽しい庭にしたいと思います。暖い心を持って餌をやり動物達に接していくたまようお願い致します。『児童に愛情の芽を育てる』ことを目標にささやかな歩みを続けております。

この芽が成長しますと棒を持つても動物をいじめなく刃物を持つても人を傷つけない人になると信じます。御協力下さい。園長」

がしばしばあつた。

モルモットが生まれると持ち去られ、伝書鳩も一夜にして盗まれは野犬に襲われ、小鳥の巣箱に集まる雀はゴム紐で作つた「はじき」や空氣銃で打たれ、花壇の草は摘み取られる。このような事が毎年繰り返された。また昨年四月入園式の頃チューリップが一齊に

咲き出して子ども達が大喜びであった。ところが二、三日後三年保育の園児がしばらくの間に全部花をもぎとつて職員も呆然とした事があった。

一年後のこの三月にチューリップが若芽を出したのに同じ

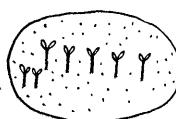
その子どもが「園長先生、水

をやるとチューリップよろこぶでしょう」と一生懸命如露で水をやつていた。一年の歳月がもたらした子どもの成長の姿を嬉しく思った。

幼児は鶏のようなもので二足歩くと忘れると言われるが、一度や二度言い聞かせるよりも良い環境に包んで毎日目に触れ繰り返し行なう間に、いつの間にか身につけたり感じさせたりしたいと思つてゐる。

幼児の心に成長するいくつかの芽を踏みにじらないようにしなければならない。今踏まれた芽は成長がにぶり生涯取り返しがつかなければならぬ。今年踏まれた芽は成長がにぶり生涯取り返しがつかなければならぬ。

愛情の芽——かわいい、うつくしい
疑問の芽——どうして、なに、なぜ
工夫の芽——やらせて、こうしたら
読みの芽——よんでもよんでも
模倣の芽——まねする



子どもの心

いと考えれば大切に育てようと努力すると思う。

この中で子どもの成長に表われる読書の傾向を見ると幼児の時

に、よんとよんとと言う頃多く読んでやった子どもほどよく読書するということで、家族が忙しくて充分読んでやれなかつた子どもは書物に対する興味がうすいという傾向がある。

何時か読んだ新聞の投書に次の記事があつて幾度も読みながら母と子の姿を思いうかべ考えさせられた。

ハトと勉強（朝日新聞ひととき欄より）

三男の大羽は八羽のハトを飼っている。中学一年から高校一年になつた現在まで、彼の生活記録はハトをぬきにしては語る事はできない。一昨年の秋、こんな事があつた。大空を気持よげに舞うハトを指さし「おかあさん、この間、野良犬にかまれたハトがあんなに元気に飛べるようになった。」私は信じられなかつた。

梅雨のころ、野良犬に胸の真中をぱっくりやられ、はらわたがとび出さんばかりの友人のハトを預かってきて、どこでどう覚えたのか、カミソリとハサミでたくみに手術を施し、口うつしでエサを与えてついに全快させたのだった。

そんなハトの好きな彼が、ある日の夕食時「ハトを飼うのをやめろ。」と夫にしかられた。夫は、彼がこのハトへの異常なまでの情熱を勉強にむけたら、どんなによいだろうと願つてしかつたのである。心にもなく強いことばをあびせた夫も、暗い顔をして隣室に消えた彼の、さびしげな姿を気にしている様子だった。夫

と三男の間にはさまた私は、この「ハト事件」をどうしたもののかと、その夜は頭がいたかった。

一学期の父兄会があつた時、私に代つて出席した長男がふんがいして帰ってきたことを思い出した。担任の先生が「動物を熱愛する生徒は、友人と共に歩めない」という劣等感がそうさせる」といつたというのである。

「成績も中の上、あんなに心のやさしい少年に育つたのは、動物のおかげじゃないか。あれから動物をうばつたら不良になつちやう。」長男はぶりぶり怒っていた。私も同感だつた。つぎの朝、三男の机を掃除していると、ノートに一枚の原稿用紙がはさまつていてるのに気がついた。三男の書いたハトの詩だつた。愛情のこもつた力強い詩だつた。

「大ちゃん、おかあさんはハトの世話ををする大ちゃんの姿が大好き——」

友が遊び戯れている元旦から、年賀はがき配達のアルバイトをして、ハトのエサ代をえた彼を思い、私は目頭をソッとおさえた。

ここでは「如何にすべきか」という事よりも環境構成への経験から「何をなしたか」という点を述べたいと思っている。

第一に、自然の指導は言うまでもなく飼育、栽培が総てではないが、実践の努力、継続する根気が必要で少し怠けると鶏舎に鶏の姿無く、飼育舎に動物がいなく、小鳥舎は巣箱だけであり、花のない花壇ということになり易い。

幼稚園では飼育し易い動物、栽培し易い植物でしかもありふれた物を選ぶようにしてゐる。

第二、飼育、栽培の種類は少なくとも数多く育てるよう心掛けている。鶏の育雛、小鳥舎の小鳥、兎、モルモットの集団飼育など多数のものに興味を持つようである。

第三、生みの親よりも育ての親と言うように、幼児が毎日餌を与えるように指導する。

餌は子ども達が毎朝紙袋に入れて持つて来てその食べ方や好きなものを知つてゐる。

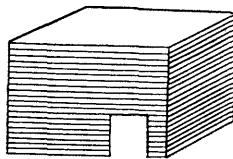
初めは良い野菜を持って来たが「人間の捨てるもので動物の喜ぶもの」を見つけさせた。みかんやりんごの皮、人参、大根の葉、馬鈴薯の皮、パン屑など動物によつてそれぞれ好むのを知り入園当初は恐れているが間もなく手渡しで食べさせるようになる。手をかければかけるほど愛情は深まるものである。

第四、幼児は動物の親よりも子に関心を持ち親しみを感じるようである。

山羊は開園以来育てて親子二代になり子山

羊が生まれて親山羊の乳房にすがる姿を飽かず眺めていた。

小鳥も、兎も、モルモットも繁殖している。兎やモルモットの子を育てるには飼育箱の中に二重に箱を入れるとよい。



生れ立ての時にのぞいて見ると子どもを良く育てない。二重の箱になると出口を藁でふさいで成長した頃に出るようになる。これは兎もモルモットも同じ傾向を持つようである。小箱は一匹入つて充分動ける大きさの木の空箱がよい。

第五、施設の費用を充分とする事ができないのでなるべく廃物を利

用する。リンゴ箱の兎箱、魚の箱の苗床、空缶詰の植鉢、みかんの小箱の巣箱などいろいろ工夫している。

第六、周囲の人の気持が大きな影響を持つ事への配慮である。園庭に動物を育て始めたのは開園早々の時からで、かれこれ十年になる。父兄や通りがかりの人に園長の物好きに思われたり、動物好きだらうと思われているが事実はその反対で内心恐怖を感じている。

餌を与える時でも手を咬まれないかと恐しく思うこともたびたびあります。

極端に動物嫌いの母に育てられた為と周囲に飼っている家も無かつた。今の園児達をこのように育てたくないということが目的であった。幼ない時に犬でも猫でも家族で飼っていた子どもは大体動物好きである。

動物嫌いという母親の大半は幼児期に動物と縁の無かった家に育つた人が多いようである。地域的の環境の違いも大きな影響を持っている。農村の子どもは美しい花を見ると移植しようと努力したり、またその場所で眺めて楽しむが、都会の子どもは何でも摘みとることを考える。動物に対しても農村の子どもは餌を与えようとする

が、都会の子どもは追い廻したり棒でもあれば突いてみようとする態度が見られる。このような態度を改める教育が知識を与える事よりも一步も二歩も先に行くべきである。

地域の環境が都会的であり、自然に恵まれない大きな欠陥があるならば、この足りないところを補う事を教育の努力点としなければならない。農村地帯で如何に自然に恵まれていても教育的関心を持たせなければ効果がうすい。

ちょうど毎日着ている洋服の総てのポケットの数を聞かれると八ヶか十ヶ位と答える。しかしそく教えると十二ヶ位もありチヨツキを入れると未だ多いことに気付く。

これはこんな身近の事でも無関心に通り過ごしているからで、一度関心を持って教えれば忘れる事がない。毎日目に触れている事でも手を動かして世話をし、その様子を語り、変化を眺め成長に気付けば、そのものと一体になり近親感を持つのである。

第七、施設、設備には最初は費用がかかっても頑丈なものを作るべきである。

兎の飼育箱も何回も荒された経験から箱の前面は下の写真のよう

に鉄の格子に金網を張ったものを使用すると安全で、山羊舎も小鳥舎もそのように作つた。

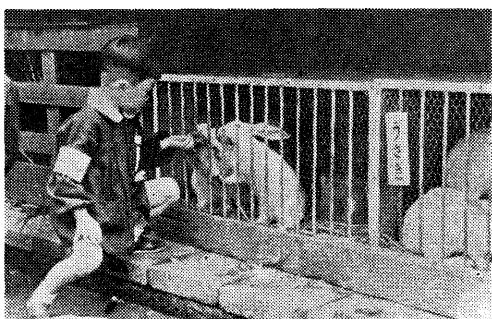
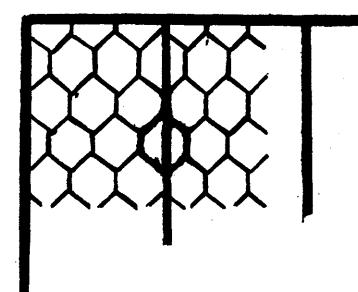
十年間の努力が幾分現われたのか終園後や日曜日に自由に入る子

ども達が施設を荒す事が少なくなったことを喜んでいる。

また園児の動物嫌いというものを調査して父兄の協力を求めて毎

四月に花を咲かせるチューリップは秋の中に花壇に球根を植え、

その前に花壇の土を作つておく必要がある。



日餌になるものを持参させ与えながら馴れさせることに努力している。やがて卒業の頃には一人も嫌いな子どもがなくなるようにしたいと念願している。

第八、最初に述べたように、飼育栽培が自然の指導の総てではないが長期間の計画と多くの配慮を必要とする仕事である。同時に豊かな人間性を養い科学心の芽生えを育てるのに効果のある面を持っている。

植鉢に朝顔を育てる

には鉢用の空缶を前もって集め腐食土は前年中に山羊や兔の敷藁、残葉、落葉などを利用して堆肥を作れば

鉢は小さくとも立派に花が咲く。よい土を作ら

らないと折角成長して

肥料不足から黄色になつて枯れてしまう。

植物の成長への努力は教育の姿と似かよつてている。

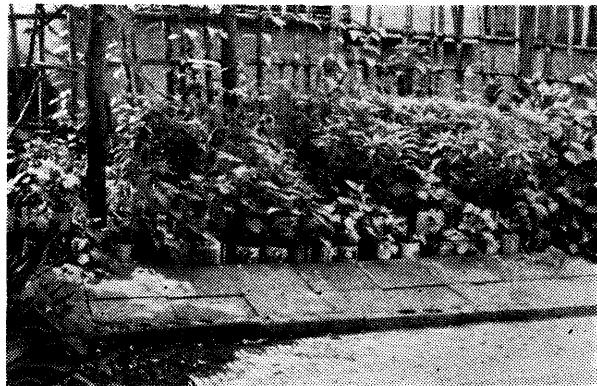
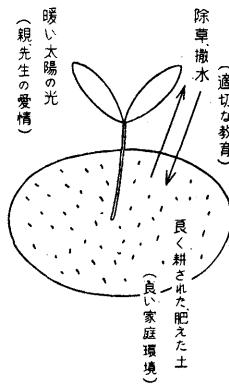
左図の三つの要素は
第九、自然に学ぶ事は大へん多い。例えば、親鶏の下に集まるひよこを見ていると教育者の心がけが教えられる。総ての雛が親鶏の羽の下に集まり自由に遊ぶけれども、則を越えず、総てのものを平等に愛し、寒さや外敵には身をもつて守り、自由遊びの時も親雛は一しょに参加して楽しんでいる。

第十、栽培の時は数少なくともそれぞれの植物の一生に触れさせるように努力している。

稻は土管のたんぽに苗作りから田植、稻刈まで行ない、稻穂を他から求めたものも一しょにし、幼稚園のたんぽの収穫として園児の家族に持ち帰らせて家族でお米にして翌日の御飯の中へ入れてもらうところまで実行している。園で収穫した幾粒かの米が入る事によって御飯に親近感がわいてくると思う。

朝顔も種子から種子へ、そして十年間の継続した種子が花を咲かせている。

教育は一面行相続とも考えられ同行の心こそ教育者に大切な心であると信じてささやかな歩みを続けている。



(道灌山幼稚園々長)